

Aとの出会いから学んだこと

—見え方の困り感に寄り添って—

豊能郡豊能町立

東能勢小学校 辻本 公子

1. はじめに

以前に出会った6年生のAは、授業中にノートを取ることがほとんどなく、感想文などを書くことを嫌がることも多く、また、とても読みにくい文字を書いていた。そんなAの支援に悩み、手探りですごした日々について報告したい。

2. Aとの日々から学んだこと

(1) Aとの出会い～何を支援すればいいのか？～

私は9月から6年生のAの支援担任としてAと関わることとなった。前任者からの引き継ぎで、「Aは支援学級担任が近づくことを嫌がり、支援を欲していない。」と聞いていた。4年生のとき、保護者から「支援学級担任についてほしくない。」という要望もあったとのことだったので、予想通り、Aは私が近づくと「来んといて。」とか「あっち行って。」と言い、その後は私が何を話しかけても無視していた。

そんな毎日が続いていたので、私はAに近づきすぎずに少し離れたところからAの現状（困っていることは何か、できることは何かなど）をしっかりと見守ることにした。

前任者からの引き継ぎや今までの支援学級の個人ファイルから、Aの苦手なことは細かな作業と、字を書くこと、運動すること（特に走ること）と聞いていた。

運動に関して、走ることが極端に遅かったので1学期の運動会のリレーは、通常の学級のクラスのみinnで話し合い、Aがリレーゾーンを効果的に使えるようにしたり、走る順番をどうするのかを考えたりしたそうである。Aを含めたクラスづくりができていることはAを取り巻く環境として安心できるものであったので、まずA個人の課題点を中心に考えていこうと決めた。

Aの様子を見ていて特に気になったのは、ノートに字をほとんど書かないということだった。また、ノートに記入する場合でもノートを左手で抱え込み、人に見られないように字を書いていた。本読みの際も、文末の読み間違いや行飛ばしなども時々あったので、ノートをとることを本人は「めんどくさいから」と言っていたが、手先の不器用さや面倒くささだけではなく、視覚認知能力に課題があると感じた。

9月後半になるころには、Aは私が話しかけることに無視はしなくなり、たわいのない話なら、A独特のユーモアのある会話をしてくれるようになっていた。普通に話をしているとAは

一般的な知識や理解力もあり、特に自分の好きなこと（政治や経済の話）についてはよく覚えられることがわかった。

私はおもに算数と国語の授業の入り込みをしていたが、算数のテストではほとんど書きこまず、返ってきた結果は本来のAの能力を表しているとは思えない点数だった。それだけに、私は支援学級担任としてAにどんな支援ができるのか、悩む毎日でもあった。

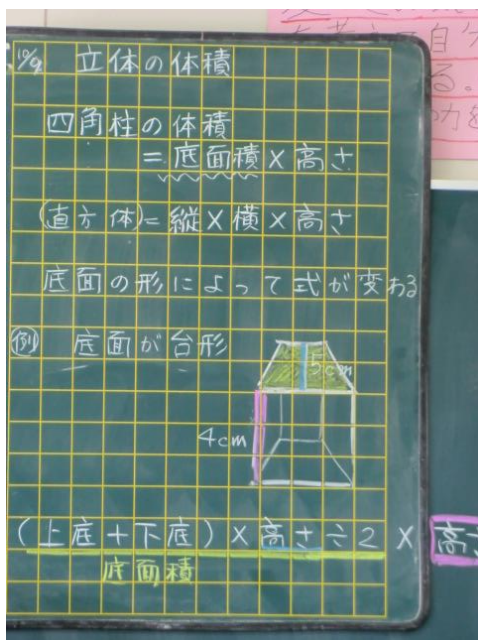
（２）実態把握～そして適切な手立て～

テストで点数が取れないのは、板書が見えていないせいなのか、見えていてもノートに書けないからか、目で見て確認ができないことが、テストの結果に結びついているのではないかと考えるようになった。

Aはパソコンは得意で家ではパソコンを駆使していろいろな情報を集めたり調べたりしていた。また自分の興味のある本も休み時間によく読んでおり、近くのものはまだそんなに見にくいようではなさそうなので、黒板を見るということの支援をなんとかできないか考えた。

私が書き写したものを、Aに渡してノートを取らせることやカメラで写した映像をAが座席で見てノートに書くようにすることなど、なんとかノートをとる方法を考えていた。そんなときに、通級指導の担当教諭に相談をしたところ意外な助言をいただいた。「書かせることにそんなに意味があるのか、書かせなくてもカメラで撮影した画像を見せるだけでいいのでは。」ということだった。ハッとした瞬間だった。

ノートを取らせるということばかり考えていた自分が本当にAに寄り添えているのか、書くこと見ることが苦手ならあえてそこをさせる必要はないのではないかと今まで考えていなかったことに気づかされた。そういう方法で支援を考えていくと、すぐに出来る方法があることがわかった。



（写真1）

（通常の学級担任と相談し）授業中の板書をカメラで写し（写真1）、印刷しそれを貼ってノートを作るという方法だった。

色々な教科でできるとよかったのだが、私が支援で入る時間割上の都合もあり、始めは社会と算数だったが、最終的には算数のみとなった。（10月から卒業まで続けた。）

A本人は何も言わなかったが、保護者はとても喜び、Aも少しずつ私に心を開いてくれるようになった。10月後半頃になると、私がそばにいても嫌がることもなくなり、11月から12月になると、わからないときは聞いてきたり、休み時間には自分から私に話しに来たりすることが増えていった。

これに並行して、私自身は「見えにくさ」に関する学習（大阪医科大学LDセンターでの視覚能力やLD関連の講習・研修や見る力に関する書物）をすすめていった。

そして（本人も保護者も）今まで頑なに拒んでいた発達検査を2学期末に受けるに至った。保護者（特に拒否の強かった父親）も了解し、本人への説得もしてくれた。

実施した発達検査によると言語理解は高いが知覚推理は低いという偏りがみられた。

また、研修（『視覚能力のアセスメントとトレーニングワークショップ』於：大阪医科大 LD センター）で学んだ以下の視覚能力の検査も行った。

- 1 対面法による眼球運動評価（滑動性眼球運動・衝動性眼球運動・輻輳）
- 2 遠見数字書写検査
- 3 近見数字書写検査
- 4 目と手の協応課題
- 5 Developmental Eye Movement Test (DEM)

検査結果から視覚機能に課題がある数値がとらえられた。本人とも話をし保護者の了解も得たうえで、3学期から視覚認知のトレーニングを週に1回行うことにした。（参考文献参照）

（3）連携した指導～通常の学級担任と中学校と～

卒業も近く、トレーニングの時間もあまりとれず、内容のあるトレーニングができたとは言いがたいが、Aとの意思の疎通ができたこと、Aに自分の苦手なことを受け入れる気持ちが出てきたことについては意味のある時間だったと思う。2学期、Aは通常の学級担任の取組の中で、人の役に立ちたいと児童会役員に立候補した。結果は残念だったが、それに元気をなくすることなく学級の中で立候補して班長になるなど、前向きに行動する姿をいろいろな場面で見せてくれた。個に応じた対応をしていくことで、自分の苦手なことを受け入れ前向きにとりくもうという思いと、クラスでの取組がうまくつながったことで、自分に自信をもてるようになったのは、確かであるように思う。

また、中学校進学にあたり、Aの視覚能力について一度病院での受診を本人と保護者に勧めた。そして中学校との引き継ぎにおいてはAの状況を理解してもらえるよう配慮した。進学先の中学校では支援学級担当はもちろん、新1年の学年団になる予定の教職員、また管理職を含めた全教職員と数回引き継ぎを行った。Aを含めた支援学級在籍児童の状況については、中学校側に十分な理解を求めることができたことでAが中学校進学後も継続した支援を受けることができると確信して卒業させることができた。

ただ支援学級担任としては、通常の学級において担任ともっと連携しながら、Aを支援していくことができなかつたかとの反省はある。今後、クラスの中で支援学級在籍児童が過ごしやすい環境や人間関係を通常の学級担任とつくるのが、他の児童も過ごしやすいクラスになるということをお忘れのないようにしたい。

（4）Aとの出会いで学んだこと

Aとの出会いから、相手の立場になり困っていることは何か（本人がきづいてないこともある）をよく見極めることが大切だとつくづく感じた。本人との意思疎通ができ、心の底から相手の気持ちを考えられるようになったときに、どんな支援ができるのかが見えてくるも

のだと思う。そして、本人や保護者と気持ちが通じ合ったときに初めてその支援がいきってくるのだと教えられた気がする。

また、気持ちが通じ合うという点では支援学級担任は児童本人・保護者とだけでなく、通常の学級担任との意思疎通がとれるということが重要になってくると思う。支援学級担任として私もつい陥りがちになってしまうのだが、「みんなと同じように」という意識が強くなればなるほど「みんなに合わせる」ようにさせてしまうということが多々ある。クラスの中でみんなに合わせてなくても、通常の学級担任と連携し、その児童ならではの活躍の場や周りの児童との関わりを意識的につくっていくことができるようにこれから心がけていきたい。そのためにも支援学級担任は、支援学級在籍児童の実態はもちろんだが、その子を取りまく周りの子どもたちの様子も見逃さないように常に心を配っていきたい。

Aとの出会いを通して、いろいろと考え、悩み、学んだ半年であったが、新しい支援の方法に出会い、何より自分の指導や対応をふり返り考える機会となったことで、少し成長できた半年でもあったと思う。

3. おわりに

中学校へ進学したAは、入学した年の5月には保護者の勧めで病院に行き、検査の結果勧められたビジョントレーニングを家庭でも行うようになった。また、体幹トレーニングも合わせて指導してもらい現在も3～4カ月に一度の通院を続けている。

進学先の中学校の支援学級担任も理解をして、本人に合わせたノートの取り方や勉強の進め方などを指導している。運動が苦手なAはクラブに入らなかったが、週に2度ほど陸上部の朝練習に参加させてもらい、学校の外周を走るなど、中学校教諭の理解のもと、苦手なことにも努力を続けるがんばりをみせている。また、生徒会にも立候補をして、活躍したという。

トレーニングの結果がすぐに出るわけではないが、AやAの保護者がAの困り感に気づき、それとどのように付き合っていけば本人が一番力を出せるのか、中学校教諭と共に考え歩んでいると聞いている。今更ながら大切に感じることは、「支援というものは、その子どもの立場に立ち、本人も気づかない困り感を見極め、固定観念にとらわれず一人ひとりに合わせた方法を考えることだ。」ということである。これからもこのことを忘れず、またAと出会って学んだことを生かし、子どもたち一人ひとりをしっかり見ていきたいと思う。

(参考文献)

- (1) 北出勝也『学ぶことが大好きになるビジョントレーニング』 図書文化
- (2) 大阪医科大LDセンターアットスクール『視覚発達ドリルシリーズ』 Knock Knock
- (3) 奥村智人『教室・家庭でできる見る力 サポート&トレーニング』 中央法規
- (4) 本多和子『発達障害のある子どもの視覚認知トレーニング』 学研